

機関番号：34502

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2009～2010

課題番号：21700638

研究課題名(和文) サッカー指導現場におけるコーチングが選手に与える影響

研究課題名(英文) Coaching Impact on Soccer[0] Players in the Field

## 研究代表者

中村 泰介 (NAKAMURA TAISUKE)

聖トマス大学・人間文化共生学部・助教

研究者番号：30454698

## 研究成果の概要(和文)：

本研究の調査を終えて、フランス(フランス国立サッカー学院(I.N.F.))、スペイン(SevillaFC)のサッカー指導現場における「パスアンドゴー」のプレーのトレーニング及びコーチングは常に「技術」と「戦術」が繋がったもの、或いは一つとして捉えられており、さらにスペインではそこに「フィジカル」「メンタル」の要素が包含されているものであった。日本においても同様の認識はなされてはいるものの、「戦術」へ繋がる「技術」の習得、或いは「戦術」の中で必要となる「技術」、といった指導者のコーチングの認識レベルをさらに高めていく必要性があり、そのことが選手のプレーを世界水準へと飛躍させる一つの手がかりになると考える。

## 研究成果の概要(英文)：

After conducting this research study, we found out that the training and coaching of "pass and go" play in the soccer training field in France (French National Football Institute, or INF) is always considered as something that connects or includes techniques and tactics. In the training field in Spain (SevillaFC), they view it as something that also includes physical and mental elements. Although the perception is the same in Japan, it is necessary to further raise the level of awareness among coaching leaders about acquiring skills leading to tactics or skills required in tactics, which, in turn, may help the performance of players to significantly advance to the world class level.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,400,000	420,000	1,820,000

研究分野：スポーツ科学

科研費の分科・細目：コーチング

キーワード：海外サッカー育成年代、コーチング

科学研究費補助金研究成果報告書

1. 研究開始当初の背景

(1) サッカー競技におけるライセンス制度の充実、多くの指導者に海外から導入された最先端のコーチング法やトレーニングメニューの情報を与え、そして数多くの真新しい表現も提供されている。だがしかし、問題点として、ことば一つ一つの意味を十分把握して、指導者は指導用語を用いているのか否かということである。いみじくも『言語技術が日本のサッカーを変える』(田嶋幸三 光文社新書 2007.11)という文献が出版され、サッカー競技において、世界トップレベル水準に飛躍するためには、「言語技術」の熟成度を高めることが強く叫ばれている。

(2) 「パス&ゴー」なのか? 「パス&ムーブ」なのか? 日本では「パス&ゴー」は「パス&ラン」「パス&ムーブ」と同じ意味として理解されていることが少なくない状況であり、これらのことばは指導現場で実際に使用されていることばである。しかし、事実、go と move や run ではそれぞれ保有することばの意味は違う。これらのことばを同じ意味として使用し、指導することで、そこで期待される実際のパフォーマンスは引き出せるのであろうか。ことばのイメージがプレーに与える影響をしっかりと考えていかなければならない。

以上が本研究を開始するにあたっての背景である。

2. 研究の目的

本研究は、サッカー競技において、身体動作を修得する際に技としてはたらく「コーチング(レトリック)」をフランス、スペイン、日本の文化圏をフィールドとして、同じ表現を用いた際に、どのような運動イメージとして身体動作の担い手に伝達され、そしてそれが実際の運動の軌跡となるのか。その一連の様相を調査し、コーチングが与える影響を3つの文化圏で比較検討し、コーチング法に新たな知見を得る試みである。詳細は以下の3点である。

(1) 本研究では、「パス&ゴー」は「パス&ラン」「パス&ムーブ」ということばの捉え方の意識調査をプリテストとして行う。

(2) 本研究では、3つの文化圏にわたり、

共通するコーチングを用いた場合に、それぞれの選手がどのような動きをするのか、といった調査研究を行う。

(3) 上記(2)から導き出された結果と1のプリテストを総合し、動作を習得する際に、コーチング、レトリックを身体動作の担い手がどのようなイメージを形成して、そして実際にそれがどのような運動の軌跡となって現れてくるのかという部分において、サッカーの指導現場におけるコーチング法への提言を行う。

3. 研究の方法

(1) 本研究は、平成21年度に「ことばの捉え方」の調査を実施した。対象は一般中学生、サッカー部所属中学生、一般高校生、サッカー部所属高校生、サッカー指導者とし、各々が捉える「パスアンドゴー」「パスアンドラン」「パスアンドムーブ」の違いを多次元尺度方により解析を行い分析した。

対象：府立Y中学校

第2学年2クラス(男子40名、女子40名、計80名)

第2学年2クラス(男子39名、女子38名、計77名)

第2学年2クラス(男子38名、女子41名、計79名)

私立K高等学校サッカー部員 86名  
小学校教員及び中・高等学校教員 62名

サッカー指導者 48人

(2) 同年にフランス国立サッカー学院にて、「パス&ゴー」に関する現地調査(指導者への聞き取り調査、選手の理想的な「パス&ゴー」に関するプレーイメージ調査(アンケート)、トレーニングの調査を実施した。

日時：2009年12月7日～12月16日

場所：フランス国立サッカー学院(I.N.F.)

対象：所属選手 1年生21名

2年生21名

3年生20名

育成コーチ2名

内容：育成コーチへの聞き取り調査

「パス&ゴー」の語彙収集、トレーニングの撮影、コーチングの録音

選手は各学年フランス全土 1500 人からセレクトされた 20 人である。各 90%~95% プロの育成センターへ進み、最終的には、20 人中の 7 人くらいプロ選手となる。育成コーチは、育成のプロフェッショナルとして学院に従事しており、かつては代表、プロ選手としてのキャリアを持ち、多くのフランス代表選手を育成している。

- (3) 翌年平成 22 年度には、スペインセビージャ FC のジュニアユース年代で「パス&ゴー」に関する現地調査(指導者への聞き取り調査、選手の理想的な「パス&ゴー」に関するプレーイメージ調査(アンケート)、トレーニングの調査を実施した。

日時： 2010 年 11 月 21 日~11 月 29 日

場所： SevillaFC (スペインサッカー)

対象： Sevilla FC ジュニアユース監督 2 人  
及び選手 36 人

内容： 育成コーチへの聞き取り調査

「パス&ゴー」の語彙収集、トレーニングの撮影、コーチングの録音

① 聞き取りの手法

聞き取りの手法として、対話構築主義アプローチの態度をとり、語りの主導権を語り手に委ね、「何を」語ったのか、に注目する一方「いかに」語ったのか、という語りの様式にも注意を払い実施した。(桜井厚(2002)インタビューの社会学、せりか書房：東京)

② プレーイメージの収集方法(語彙収集)

選手対象のプレーイメージの収集方法はいくつかの「パス&ゴー」に関する VTR を鑑賞してもらい、「技術面」「戦術面」「精神面」のいずれかの視点より「なぜ成功したのか」、を自由形式にて記述してもらった。フランスの調査ではフランスサッカーに造詣の深い 1 人、データ分析及び統計の専門体育研究者 1 人、報告者(中村)1 人、計 3 人で、スペインではスペインサッカーに造詣の深い 1 人、データ分析及び統計の専門体育研究者 1 人、報告者(中村)1 人、計 3 人で、重複チェックを行った。特に所属選手の動作がどのような形で言語として導き出されたのか(牽引力)、という点に注意を払った。

研究計画一覧表

平成21年度	研究土台	申請者の「身体動作」に関する研究実績
	プリテスト	ことばの捉え方に関する調査
平成22年度	本調査	フランスでの現地調査
		スペインでの現地調査
		日本での現地調査
	分析	現地調査の分析
平成23年度 (研究年度外)	検証	調査結果を基にした日本での検証
		指導現場への提言
		国際学会にて発表

4. 研究成果

- (1) 「ことばの捉え方」に関する調査より以下のことが明らかになった。

- ① 指導者と選手、生徒の「パス&ゴー」の捉え方に若干のズレが生じている。  
② ①は、指導者側は「指導しやすい」指導言語という意味でことばを捉えているのに対して、受容者側の生徒・選手は「動きやすさ」という意味でことばを捉えている傾向を導き出した。

- (2) フランス国立サッカー学院(I.N.F.)の現地調査からは、以下の 3 点を明らかにした。

- ① コーチングで必要となることは、「ことば(コーチング)が大事なのではなく、それが意味するものが大事なのである」ということが全てのコーチングメソッドの中で通底しているものであった。  
② その他には「技術」習得のトレーニングに関するコーチングでは、「戦術」と一つとして捉えられていることが重要な点であり、選手へ「次のプレーへどのように関わっていくのか」という視点が含まれていることが重要なポイントであった。  
③ 選手から語彙の収集によって明らかにした理想的な「パス&ゴー」のプレーイメージは 135 個の語彙の収集に成功し、22 個に整理した。

いいパスコースがあった	相手チームを不安定にできた
味方プレイヤーが動いていた	オフサイドにならないようにできた
パスした後も動けた	移動すべきスペースがあった
リターンパスがうまくきた	相手プレイヤーのマークがなかった
状況判断がうまくできた	ゴールとの距離が適切だった
移動するべきところに移動できた	味方プレイヤーの後方サポートがあった
うまくボールコントロールできた	ボールタッチを少なくできた
相手チームのポジションが悪かった	パスする味方プレイヤーの距離が適切だった
サイドでプレーを展開できた	体的に元気になった
ボールを持ちすぎなかった	やる気があった
マークを外す動きができた	トレーニングが十分にできていた

- (3) スペインセビージャ FC で実施した調査からは以下の 3 点を明らかにした。

- ① 速い「戦術」の中で必要となる「技術」を習得するという視点がコーチングの中に含まれていることが重要である。さらに、トレーニングメニューには「技術」「戦術」に加えて「フィジカル」と「メンタル」の要素が入っていることが必要不可欠である。このことは日本の指導書の中においてももしっかり捉えられていることでもある。

- ② 選手から語彙の収集によって明らかにした理想的な「パス&ゴー」のプレーイメージは36個の語彙の収集に成功し、9個に整理した。

SevillaFC所属選手の語彙の収集	
マークを外す動きができた	次の展開を見ていた
動くべきスペースがあった	動かないことがベストだった
パス求める選択肢があった	これ以上パスの選択肢がない
守備のすき間を空け引き出させた	相手守備のすき間を作るため今のポジションを保持した
相手チームの陣形が不安定だった	

- ③ セビージャの育成スタイル(=コーチングメソッド)と地域色が個々の選手を育成するにあたりプラスに作用している。このことは、サッカー競技にとどまらず、スポーツの育成スタイルを考える上では、極めて有意義な知見を与えてくれるものである。2011年度より、セビージャの **Antoino Solana** 氏と「サッカー育成年代における日本・スペイン国際比較研究」を共同研究で実施しており、スペインセビージャFC特有の育成スタイルを手がかりに、我が国日本における育成スタイルを検討している。(兵庫体育・スポーツ科学学会奨励研究)

#### (4) まとめ

本研究の現地調査(フランス、スペイン)より以下の点が明らかになった。

- ① 同じ指導言語である「パス&ゴー」を用いても、指導者のコーチング(プレーイメージ)が選手に影響を与えている。
- ② ①は、組織の「戦術」と深く関わっていることが重要であり、それは「パスしたら何のために動くのか」という問いを常に選手に意識させるものでもある。「パスしたら動く」ことはできているが、「どこに動くのか」という点で、日本の育成年代の課題であるといわれている。

以上の点をさらに分析し、日本において調査及び検証を行い、指導現場へ提言を行っていく。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 中村泰介・日野公美子、サッカー指導現場におけるコーチングの研究—指導者の発することばのイメージと生徒・選手が構想する運動イメージ—、サピエンチア聖トマス大学論叢、査読有、第44号、2010.4、p.83-p.92

- ② 中村泰介、より流動的な「パス&ゴー」を可能にするためのコーチング法の探求—フランス I.N.F.(国立サッカー学院)の現地調査より—、コーチング学研究、査読有、2011.3、第24号 No2 p.215-p.218

[学会発表] (計4件)

- ① 中村泰介・日野公美子、「身体のパフォーマンス」から考える身体技法の習得に関する一考察—指導者と生徒・児童の言葉の捉え方のズレに着目して—、日本教育学会、2009.8、東京大学。
- ② 中村泰介、身体のパフォーマンスから考える身体技法の習得に関する一考察—指導現場の「ことば」と「運動イメージ」—、日本教育学会、2010.8、広島大学。
- ③ 中村泰介、フランス I.N.F.(国立サッカー学院)の現地調査からみるコーチング法の実態—育成コーチへの聞き取り及びトレーニング現場の調査をもとに—、日本体育学会、2010.9、中京大学。
- ④ 中村泰介・河端隆志・小田伸午・**Antonio Solana**・鈴木晶子、サッカー育成年代におけるプレーの「流動性」を可能にするコーチング法の研究—スペイン・SevillaFCの育成年代の現地調査をもとに—、兵庫体育・スポーツ科学学会 2011.5、播磨健康いきいきセンター。

#### 6. 研究組織

##### (1)研究代表者

中村 泰介 (NAKAMURA TAISUKE)  
 聖トマス大学・人間文化共生学部・助教  
 研究者番号：30454698

##### (2)研究協力者

中村(旧姓日野) 公美子  
 (NAKAMURA KUMIKO)  
 平安女学院大学・子ども学部・講師  
 研究者番号：40597184

##### (3)研究協力者

松原 英樹 (MATUBARA HIDEKI)  
 JFA アカデミー福島 U-14 監督

##### (4)研究協力者

Antonio Solana  
 Sevilla FC